

## 対決ではなくて、対話こそが平和を作る

### 日中関係改善の歴史からいまの日朝関係を考える

楊 志輝 (ヤン ツフィ 恵泉女学園大学准教授)

アメリカ合衆国（米国）のトランプ大統領と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の金正恩委員長による史上初の米朝首脳会談がまさに開かれようとした時、それまでに北朝鮮に対して対話ではなく、最大限の圧力をかけ続けると、対決姿勢をとってきた日本政府首脳は、一転していわゆる日本人拉致問題の解決に向けて北朝鮮と直接協議していく姿勢を表明し、日朝首脳会談の実現に意欲を示した。また、米朝首脳会談が開かれる前日の6月11日に、超党派の「日朝国交正常化推進議員連盟」が約10年ぶりに総会を開き、拉致問題解決に向けて議員外交を進めることを決議した。さらに、12日米朝首脳会談の終了後安倍晋三首相が会見を行い、「拉致問題を提起してくれたトランプ大統領に感謝したい」と述べたという。不思議な気がしてたまらない。

かねてから拉致問題の解決を政権の最重要課題として掲げ、北朝鮮の脅威とそれに対峙して国民を守る強い政権を内外にアピールし多くの支持を集めてきたわりに、その間拉致被害者の救出のために政府、政治家は果たして有効な手立てを講じてきたのかと疑われても仕方がなかろう。2002年9月小泉純一郎首相と金正日委員長による日朝首脳会談で日本人拉致被害者の事実が公になってから早くも20年近くの歳月が流れた。拉致被害者の生存を信じ、その早期帰国を願い、国に期待を寄せ続け翻弄されてきた被害者家族の心情を察するに余りある。

「ニクソン・ショック」ならぬ「トランプ・ショック」を受けて、日本の対北朝鮮外交はようやく対決から対話へ舵を切ろうとしたように思えるが、拉致問題の解決、朝鮮半島の非核化、ひいては日朝国交正常化に向けて課題は山積する。温故知新、国交正常化にいたる日中関係の戦後史を紐解くと、戦争や植民地支配といった戦後処理の問題、日本人抑留問題、核兵器の開発など、多くの問題はいまの日朝関係にも共通していることに気づくだろう。

第二次世界大戦後、台湾に逃れた蒋介石の国民党政府を相手に、吉田茂政権は米国側の脅しで「日華平和条約」を結び、不十分な戦後処理を行ったばかりでなく、中国共産党が樹立した中華人民共和国政府との関

係正常化の扉を開ざすことにもなった。そのようななかで、日本の自主性を失うことなく党派とイデオロギーを超えて日中貿易促進に努力することを掲げて超党派の「中日貿易促進議員連盟」が誕生した。深刻な経済不況からの脱出と共に、米ソ冷戦対立の中で反戦平和を目指すといった要因もあるが、あの侵略戦争の不幸な過去を踏まえ日中友好を重視する立場から関係正常化に向けて対話と連携を強めようとする思いも見取れる。その後、米朝間の軍事対立に巻き込まれた中国が国連に「侵略国」と認定され、厳しい経済制裁を受けるなかでも、日中民間貿易協定を結び細々と日中交流・対話を重ねていた。1953年朝鮮戦争の休戦が実現すると、衆参両院で日中貿易促進の決議がなされ、様々な民間友好団体を通じての日中交流が活発に行われるようになった。これらの交流活動は、日中両国間の緊張緩和・相互理解に寄与したにとどまらず、中国残留日本人の帰国問題、生死不明者の調査、遺骨返送、抑留された戦犯者の処遇など戦後日中間の懸案解決に道を開くものともなった。

1950年代半ば、国際的な緊張緩和と対ソ対中友好を標榜する鳩山一郎政権、石橋湛山政権の誕生に合わせ、中国政府も建国後初めて総合的対日方針を打ち出し、対日戦争賠償請求の放棄を表明したり、千人にも上る旧日本軍戦犯を死刑などに処せず釈放して帰国させたりして寛大な戦後処理を行い、国交正常化の実現に意欲を示した。また、1964年初の核実験に成功した中国が対立する米ソ両国と肩を並べることになったが、周恩来総理が自ら池田勇人首相に親書を送り先制攻撃のないことを表明すると共に、核兵器禁止のための世界首脳会議の開催を呼びかけた。

残念ながら、対米追随、反共・中国敵視の政策をとる岸信介政権、佐藤栄作政権のもとでは、対話の道が途絶え、日中間の緊張関係が続いていた。

「ニクソン・ショック」で崩壊した佐藤政権に代わって登場した田中角栄首相・大平正芳外相のリーダーシップのもとで1972年に日中首脳会談が行われ、関係正常化が実現した。「日中平和友好条約」の締結から40周年を迎えた今年の5月に訪日した李克強首相が日中首脳会談で「両国は風雨を経て曲がり道をたどったが、風雲は過ぎ去り晴れ空となった」と述べた。李首相の初の日本公式訪問、歴史的な米朝首脳会談、うっとりしている日が続く梅雨空に一縷の光がさしたように思えるが、この平和と安定がつかの間の晴れ間にならないように、東京YWCAの皆様をはじめ、長い間自他を尊重し、平和のためにたゆまぬ努力を重ねてきた良識のある日本の方々に心から期待したい。